

日本児童文学の現在—サステナブルに生きさせられる子ども

藤本 恵

1 作品でたどる歴史

各時代の代表作を紹介しながら、日本の児童文学の流れをたどってみます。作品のなかに、子どもと大人のどんな姿が見えてくるでしょうか。子どもと大人、子どもと私たちの社会は、どのように関わってきたのでしょうか。

- (1) 巖谷小波『こがね丸』1891
- (2) 小川未明『赤い蠟燭と人魚』1921
- (3) 松谷みよ子『龍の子太郎』1960
- (4) 那須正幹『ぼくらは海へ』1980

2 作品の語る現在

送りだされたばかりの作品を読んでもみます。とくにSDGs、サステナビリティに注目して、子どもとの関わりを探ります。私たち大人は、子どもに何を求めているのでしょうか。子どもは、どのように生きようとしているのでしょうか。

- (1) SDGsがやってきた
- (2) サステナビリティの語り方
- (3) 抵抗する中学生
- (4) 安心する小学生